

現代中国の言論空間における「一二・九知識人」

及川 淳子

日本大学大学院総合社会情報研究科

“Intellectuals of the December 9 Movement.” the Speech Space of Modern China

OIKAWA Junko

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

The main intention of this research is to analyze various factors relating to the speech space of Modern China, and examine the "political culture" of Modern China that acts on it. This paper focuses on the theory of Mao Zedong's former secretary Li Rui who is known as a political reform disputant, and attempts to analyze "reformer Lao Ganbu" referred to as the "Intellectual of the December 9 Movement" and also analyzes the Magazine *Yanhuang Chunqiu* of which they preside over. Using the techniques of "the reformer of the Chinese old guard," it is possible to understand political patterns of the "political culture" of the Chinese Communist Party's (CCP) dark past, serving as an authority not only from a historical perspective, but also as a criticism of the political system. This is a fight over intellectual hegemony in the speech space of Modern China, and it is also a fight over a political hegemony in the CCP.

1.はじめに

現代中国の言論空間における諸要因と、そこに作用する「政治文化」について検討することが筆者の主な研究志向である。これまでの研究では、2006年に『中国青年報』の付属週刊紙「氷点週刊」が停刊処分を受けたいわゆる「氷点事件」に焦点を当て、停刊処分に抗議して中国共産党の「改革派老幹部」たちが連名で発表した「共同声明」と彼らのネットワークについて検討した。「改革派老幹部」たちが現体制と相互依存関係にありながら「知識人」の代替機能を果たしている点を指摘し、中国の言論空間における構造的な問題を考察した¹。

本稿では、これまでの考察を踏まえた上で、「改革派老幹部」たちの言説についてさらなる検討を加えたい。具体的には、政治改革論者として知られる元毛沢東秘書の李鋭の言説を中心に、「一二・九知識人」と称される「改革派老幹部」と、彼らが主宰する雑誌『炎黄春秋』について考察する。「一二・

九知識人」の定義については後述するが、1935年の学生運動を現在に至ってもなお提起し、自らのアイデンティティを規定し、歴史を回顧して記憶の再生を行いながら現在の体制を批判するという「改革派老幹部」たちの手法は、中国共産党の「政治文化」が色濃く反映された政治パターンとして分析することが可能ではないだろうか。また、「改革派老幹部」たちの言動は、ある意味において中国の言論空間における知的ヘゲモニーをめぐる争いであり、同時に共産党内における政治ヘゲモニーをめぐる争いでもあると考えられるのではないだろうか。これらの仮説に基づき、「改革派老幹部」たちが「知識人」としての代替機能を果たす上で、その自己定義の根拠として語られる「一二・九知識人」について検討することが本稿の研究目的である。

本稿の問題意識の出発点となったのは、『炎黄春秋』2008年4期の巻頭に掲載された李鋭の「李昌と“一二・九”世代」である²。その詳しい内容について

ては後述するが、議論を展開する前提として、一二・九運動と「一二・九知識人」について若干記述しておく必要があるだろう。

一二・九運動とは、1935年12月9日に発生した学生運動である。当時、日本は華北分離工作の一環として傀儡政権の冀東防共自治委員会を設置していた。これに対し、北平（現在の北京）では約6000名の学生が「停止内戦、一致对外」、「打倒日本帝国主義」のスローガンを叫んでデモ行進を行い、授業のストライキを決行した。学生運動は全国的に展開され、学生の共産党支持が増加して抗日民族統一戦線への動きを加速させることとなった。

中国国内においては、「中国共産党が指導した学生愛国運動」という定義が一般的であり、「北平学生の愛国闘争は、全国人民の熱烈な共鳴と支援を受け、杭州、広州、天津、上海、武漢などの学生が次々と授業ストライキやデモを行い、これによって全国的に抗日救亡運動の新たな高まりが起こった」と解説されている³。

本稿では、一二・九運動そのものについて議論することが目的ではないが、共産党が一二・九運動に対してどのような評価を与えているかについて言及しておきたい。共産党の指導が強調されているのは、1939年に毛沢東が延安で語った「一二九運動的偉大意義」を根拠としている。毛沢東は、一二・九運動4周年記念の講話で、「一二九運動において共産党は骨幹の役割を果たした。共産党がなければ、一二九運動は発生不可能であった」、「若い学生たちは一二九運動の焚物であり、あらゆる準備は整っていたが、火をつけることが欠けていた。火をつけたのが誰かといえば、それはつまり共産党である」、「一二・九運動は偉大な抗日戦争の準備であった」と語った⁴。

中国の近現代史における学生運動は、1919年の五・四運動が広く知られている。共産党の主張によれば、反帝国主義の愛国運動であった五・四運動は新民主主義革命の原点と考えられ、新文化運動などの背景を伴ってその後の中国革命史に画期的な意義を有しており、中華人民共和国の中心となった指導者たちにも直接間接の影響を与えた。

五・四運動と一二・九運動には学生運動という共通項はあるものの、時代背景や運動の性質、その影

響力などは大きく異なっている。しかし、毛沢東は「一二・九運動は五・四運動に及ばない、つまり、前者は後者の政治的な意義の偉大さに及ばないのだ」という人もいる。これは正しいだろうか？正しくはない。我々は両者の意義は同じく偉大だと考えている⁵と評価した。五・四運動後の1921年に成立した中国共産党の主張に基づけば、プロレタリアートが指導的勢力を握ったとされる五・四運動を現代中国の原点として象徴的に語ることと同時に、自らの影響力を示す学生運動として、一二・九運動における共産党指導の重要性を強調することに意義があるものと考えられる。

1995年12月8日に開催された「一二・九運動60周年大会」において、当時政治局常務委員であった胡錦濤は「一二・九運動は中国共産党が指導した愛国青年学生運動である」と従来の評価を強調しており⁶、一二・九運動への評価と共産党指導の重要性に対する認識は、現在もなお踏襲されている。

一二・九運動の概要と中国共産党の評価について概観したが、本稿で議論すべきは、運動の本質論や評価に対する検証ではなく、一二・九運動の時代を背景とする「一二・九知識人」についてであり、次の第2節において「一二・九知識人」の概念と代表的人物について検討する。

なお、本稿の議論に関する先行研究としては、一二・九運動自体についての史料が大半であり、その多くが中国国内において共産党史研究に属して編集されたものや当事者の回想録である⁷。日本における関連の先行研究としては平野 正による研究があり、一二・九運動の展開のみならず西安事件と民族統一戦線についても検討しているが、その基本的な観点は「“一二・九運動”を学生運動の範囲に限定せず、抗日民族統一戦線運動の一環」としてとらえるものである⁸。「一二・九知識人」についての研究は、管見の限り後述する資料に限られるが、関連する資料を適宜取り上げながら議論を展開し、「一二・九知識人」が現代中国の言論空間において問いかけている問題を検討していきたい。

2. 「一二・九知識人」という存在

2.1. 「一二・九知識人」の定義

「一二・九知識人」の定義について、また代表的な人物や言説、それらの歴史的な意義について検討された資料は非常に限られている。現代中国の思想や知識人研究で知られる丁東、高増徳、智効民、謝泳による「“一二・九”知識分子的歴史命運」と題する座談会の記録（以下、「座談会記録」と略称）が、本稿の問題意識に直接参考になる唯一のものと言っても過言ではないだろう⁹。ここでは、この「座談会記録」をテキストとして検討し、「一二・九知識人」という存在について考察する。

高増徳によれば、「一二・九知識人」という呼称は元工人出版社社長で改革論者として知られた何家棟が、その著書『我們来自何处、又去往哪里』において用いたのが最初であったという¹⁰。同書は現在入手不可であり、内容を確認することができないので、「座談会記録」に引用された該当箇所を転訳する。

“一二・九”世代は3、40年代に民族が滅亡に瀕していた最も重要な時期に歴史の舞台に登場したが、彼らの中から大量に現れた比較的成熟した思想家はその後の時代よりも多かった。顧準はこの時代の思想家の中の寵児である。顧準と年齢がほぼ同じ胡喬木は20世紀後半の中国の思想と政治の発展の方向に多大な影響を与えたが、彼の役割は毛沢東と鄧小平の影に覆い隠されてしまい、内輪の者でなければ知る由もない。杜潤生、于光遠、李銳、鄧力群、胡繩、王若水、李慎之、王元化、邵燕祥などは年齢的には十数歳の違いがあるが、いずれも等しく“一二・九”世代に入る。

何家棟は、ここでは「“一二・九”世代」という表現を使用し、「一二・九知識人」の定義を明確にしているわけではないが、ここではほぼ同義として使用されており、顧準や胡喬木をはじめとする具体的な人物たちの名が登場したことで、その含意が一定程度示されているといえよう。顧準は経済学者、思想家であったが、右派として批判されて文革中の1974年に不遇の生涯を終えた人物である。代表的な言説である「民主與“終極目的”」に見られるように、科学と民主についての論述が多く、文集や日記が多数

出版されている¹¹。顧準と、中央政治局委員を務め共産党の保守派のイデオログであった胡喬木の両者では政治思想の傾向が全く異なっており、彼ら二人をもって「一二・九知識人」の思想的特徴を概括することは不可能である。むしろ、この座談会で謝泳が指摘しているように、「“一二・九”学生運動に直接参加してこそ“一二・九”知識人というわけではなく」、「“一二・九”知識人のグループは、主に“九・一八”以後に、民族滅亡の危機を救うため革命に身をささげた若い学生」¹²と理解するのが妥当であろう。「一二・九知識人」とは、一二・九運動を自らの政治志向の原点とし、同運動に一定の影響を受けた世代の知識人を意味するが、その後の政治的な傾向は多様である。「座談会記録」で語られている「一二・九知識人」という概念は、あくまでもその同時代性が重要なのであり、彼らの個別具体的な経験や思想、ある傾向を共有する人々の思想的な状況を検討した上で、「一二・九知識人」という概念を再定義し、議論することが必要であると考えられる。

2.2. 「一二・九知識人」による歴史の「反思」

「座談会記録」において、謝泳は1910年から20年前後に生まれた知識人について興味深い分類を行っている。どのような経験が彼らの思想と行動に直接的な影響をもたらしたかという観点から、「西南聯大知識人グループ」、「延安知識人グループ」、「“一二・九”知識人グループ」に分類してそれぞれの傾向を論じている。ここでは字数の制約上個別の解説や比較を行うことはせずに「“一二・九”知識人グループ」のみを取り上げるが、謝泳は次のように「一二・九知識人」について述べている¹³。

彼らはもともと理想を抱いた若い学生で、抗日救亡の民族生存の危機に際して、比較的過激な革命の方法を選択した。彼らの理想と勇氣は、彼らの人生において永遠に感動的なものなのだ。（中略）問題は、彼らが最後に選択した歴史的な歩みと、彼らの理想追求の間には緊張関係が生じてしまったということだ。この緊張関係は、40年代の延安での搶救運動において突出した。（中略）「一二・九知識人」が延安知識人と異な

るのは、その政治的立場ではなく、生き方の姿勢と知的な見識である。これが 90 年代以降に「一二・九知識人」グループの中に歴史を省みる比較的強い傾向が生まれた理由でもあり、例えば韋君宜、李銳、李昌、李慎之、王瑤、趙俪生など、彼らの回想録の中に見られるのは自身の人生の経験に対する否定的な評価である。(中略) 晩年の「一二・九知識人」の思想的な状況は、大体が自由主義の原点に回帰する一種の傾向を有していた。

「生き方の姿勢と知的な見識」¹⁴という表現は抽象的な表現だが、「一二・九知識人」のあるグループにとっては「自由主義」が原点であると指摘されていることから、彼らの思想と行動についてさらに理解を深めることができよう。一二・九運動の際に学生たちが行った請願行動の具体的な要求を見ると、「華北防共自治委員会反対」、「内戦停止」のほかに「人民の言論・集会・出版の自由を保障せよ」¹⁵という項目や、「中華民族の自由解放の実現」¹⁶が謳われており、「一二・九知識人」を語る際には「自由」が重要なキーワードであることが指摘できる。

「座談会記録」において、丁東は「一二・九知識人」に共通する歴史的な経験、すなわち延安抢救運動、反右派運動、文化大革命、1970 年代末の思想解放運動の 4 点について指摘し、特に思想解放運動に関連して次のように述べている¹⁷。

20 世紀の 70 年代末の思想解放運動の中で、この思想運動の主体は「一二・九知識人」であり、彼らは波乱の中で歴史的な貢献を果たした。例えば、于光遠、鄧力群、黎澍、吳江、李昌などだ。だが、この思想解放運動を通じて「一二・九知識人」も分化し、彼らの中にも異なる思想傾向の選択が見られるようになった。于光遠、李銳、杜潤生、李昌らは歴史を省みることを始め、彼らよりも比較的若い李慎之は中国の自由主義知識人についての研究を、王元化はこの時期に多くの学術問題を省みるようになった。

引用文では「歴史を省みる」と訳したが、原文で

は「反思」という単語が用いられている。「反思」は、ヘーゲル哲学における「反省」、「思考の自我運動」とも言われるドイツ語の「Nachdenken」の意識に起源があり、中国においては「80 年代から、過去を振り返り、歴史の過程や社会の思想傾向に対して深く思考すること、主に思想や政治、文化の領域において使用される」言葉になったという¹⁸。「反省」が過去の行為を顧みて批判的に考察する行為であり、しばしば道徳的な価値判断を伴うのに対して、「反思」は社会的な思想や歴史の大局における個人の経験を回顧し、歴史の過ちを是正して教訓を汲み取る意思と行動であると考えられる。

ここでは「一二・九知識人」という存在について検討したが、概括すると、一二・九運動に直接または間接の影響を受け、自由への憧れを抱きながら民族滅亡の危機を救うため抗日戦争と革命に身を捧げた当時の学生であり、その後数々の政治的な経験を経て、晩年は思想的傾向が分化した知識人たちであると理解することができる。つまり、「一二・九知識人」とは、一二・九運動を思想的な出発点とする知識人を概括する名称ではあるが、前述のとおり彼らの思想的傾向は多様化しているため、個人あるいは個別のグループごとの特徴を検討することが必要である。「一二・九知識人」という概念は中国の知識人研究において主流ではないが、「座談会記録」では具体的な人物の名を複数挙げながら論じられており、「重要な文章は、その多くが“一二・九知識人”の筆によるものである。そして 90 年代以降、最も深いところから歴史を省みているのは、やはり“一二・九知識人”である」という記述も見られることから、現代中国の言論空間における「一二・九知識人」の存在と彼らの言説について検討することには、一定の意義があるといえよう。

3. 李銳の「一二・九世代」としての自己認識

3.1. 李銳と一二・九運動

前述した「座談会記録」において、幾度も名前が挙げられていた一人が、元毛沢東秘書として知られる李銳である。本稿では、李銳の言説を中心に「一二・九知識人」についての考察を展開していくが、ここではまず李銳自身の一二・九運動との関わりに

ついて述べておく。

1917 年生まれの李鋭は、1937 年に中国共産党に入党した老幹部である。抗日戦争時期は延安で党の青年工作或新聞宣伝工作に従事し、建国後は『新湖南報』新聞社社長、湖南省宣伝部長などの新聞工作を経て、1952 年には水利電力副部長に就任した。当時議論されていた長江三峡ダムに反対し、その大胆な物言いが毛沢東に気に入られて 1958 年には兼任秘書に就任したが、翌 1959 年の廬山会議で「彭徳懷反党集団」の一員とみなされ、党籍剥奪処分を受けた。文革期には 8 年間にわたり秦城監獄に投獄され、1979 年の名誉回復後は電力工業部副部長、中共中央組織部常務副部長、中央顧問委員会委員などの要職に就いた。90 歳を超えてなお文筆活動は活発であり、政治体制改革や「言論の自由」に関する率直かつ大胆な発言で知られ、中国共産党内における「改革派老幹部」の代表的人物である。

一二・九運動の後、地方都市の大学生たちの間では北京で発生した運動にどのように呼応するかが盛んに議論された。当時、李鋭は武漢大学工学院機械学科に学ぶ学生であったので、北平で行われたデモに直接参加したわけではないが、一二・九運動の強い影響を受けた当時の地方都市の学生の具体的な行動の事例としてその経験を見ることができる。李鋭が 1980 年代初頭に一二・九運動を回想して書いた「一二・九運動前後在武漢」では、それまで政治運動の経験がない学生たちが、腕章や抗議のスローガンを書いた横断幕を用意してデモを組織し、運動を組織化して雑誌の編集などを行い、経験を積み重ねていく様子が詳細に記されている¹⁹。武漢では 12 月 17 日に「武漢中等以上学校学生救国連合会」が成立した。李鋭もその会員として活動し、続いて 12 月 20 日に発足した「武漢大学学生救国会」の一員に選出され、宣伝部門を担当して雑誌『救中国』刊行に携わった。武漢で大規模なデモが行われた後は「武漢大学青年救国団」で活動し、共産党への入党を希望するようになり、1937 年 2 月には 8 人の同学たちと自発的に共産党武漢臨時支部を組織した。当時は「自ら党支部をつくり、党を建設しながら、党組織との接触をはかる」²⁰方法が採用されており、李鋭たちもまた自ら臨時の党支部を設立して共産党の組

織と接触していたようである。李鋭は 3 か月後の 5 月に北平に赴いて正式な共産党員となった。当時の学生が政治的意識に目覚め、実際の運動を通じて共産党への入党を希望し、運動の組織化などの実務を経験した上で正式な党員になったという李鋭の経験は、一二・九運動に影響を受けた当時の学生たちの共産党入党の動機と行動を示すひとつの典型として考えることができるだろう。

李鋭は「党の指導がなければ我々は舵のない船にすぎず、大海原で漂うことしかできない」²¹と共産党の指導の重要性を強調し、一二・九運動を回想した文章の最後に次のように記している²²。

45 年前の歴史を回顧し、次のような結論を導くことが可能である。現代の中国では、革命運動はいかなる反動的な力も阻止や消滅はできず、党の影響力が存在してさえいれば、党の組織がなくても、革命の群衆は自発的に党と共に歩み、策を講じて党の指導を探し求めるものだ。

前述したように、一二・九運動には共産党の指導による愛国主義青年学生運動であったという評価が与えられているが、運動の影響を色濃く受けた当時の学生にとっても「党の指導」の重要性を認識する直接的な契機となっていたようである。共産党員としての政治的な歩みの原点として、運動から半世紀近くを経た 1980 年代になってもなお回顧される重大事件であったことが理解される。

3.2. 李鋭が語る「一二・九世代」

ここでは、李鋭が自分自身をも含む「一二・九世代」をどのように認識しているかについて検討したい。参照する一つ目の資料は、武漢時代の旧友で元湖北省社会科学院院長の密加凡を追悼した短い文章である²³。「武漢中等以上学校学生救国連合会」が政府の圧力によって解散させられた後、武漢の急進的な学生たちは「武漢秘密学連」を組織し、その活動を通じて李鋭と密加凡は親しくなった。李鋭たちが組織した共産党武漢臨時支部に、密加凡は 1937 年 6 月に加わっている。李鋭が北平で正式な共産党員となり武漢に帰った直後のことだ。一二・九運動

が契機となって学生運動が発展した武漢で、運動を共に経験し共産党への入党という志を同じくした密加凡の死を悼み、李鋭は次のように記している²⁴。

艱難を共にした昔からの友人たちが次第に少なくなってきた。だが、友人たちよ、どうか安心してほしい。我々は余命いくばくもないが、依然として当時追求した自由、民主の現代化された新しい中国のために、わずかながらも仕事をしているのだ。

1980年代初頭に書かれた回想記では、一二・九運動における共産党の指導が強調されていたが、2006年に書かれた密加凡の追悼文では、一二・九運動当時を回顧しながらも党の指導に関する記述は一切見られず、当時自分たちが理想とした「自由・民主」に言及しており、その実現のために現在もなお努力していると記されている。一二・九運動に影響を受けた同世代として旧友を追悼する際に強調されるのは、もはや共産党の指導ではなく、青年時代に抱いたとされる「自由・民主」という言説なのであった。

李鋭が語る「一二・九世代」を検討する際に重要な資料となる二つ目は2008年に書かれたもので、1914年生まれで元中国科学院副院長、党書記であった李昌に関する文章、「李昌と“一二・九”世代」である²⁵。一二・九運動当時清華大学の学生だった李昌は、清華大学民先隊大隊長を務めるなど運動の代表的な人物であり、1939年に毛沢東が行った「一二九運動的偉大意義」の演説の中でも言及されているほか、1956年の中国共産党第8回全国代表大会では、一二・九運動の学生リーダーとして中央候補委員に当選した人物である。「一二・九世代」である李鋭と李昌は、「党、歴史、中国の問題とその活路について、同様の或いは似通った認識と考え方を多く有している」という²⁶。文中で、李鋭は「一二・九運動と抗日戦争時期に入党した大学、高校の青年学生」たちの特徴について、以下のように述べている。

李鋭によれば、「一二・九世代」は「強烈な愛国の心情と鮮明な社会への責任感」を有しており、彼らが共産党に接近し最終的に入党したのは「党の抗日救亡の主張と、国民党の独裁と妥協に反対する政

治的態度のためであり、このグループの政治的要求と一致していた」。彼らが「共産党のイデオロギーを受け入れ始めたのは、マルクス主義やレーニン主義の古典を系統的に読んだためではなく、より多くは左翼文学作品と進歩的な政治の書物や雑誌による」ところであった。そして「一二・九世代」のもっとも顕著な特徴として記されているのは、「民族主義（抗日救亡）と民主主義（国民党蒋介石の独裁と専制に反対する）が、彼らが共産主義運動に身を投じた基本的な思想の動機」なのであり、「理想主義と独立した人格」が際立っている点であるという²⁷。

一二・九運動の学生リーダーであった李昌を顕彰する文章であるため、「一二・九世代」の特徴として挙げられている「理想主義と独立した人格」が妥当な表現であるか否かは批判的に考察する必要があるが、ここでは李鋭が自分たちの世代をどのように自己定義しているのかについて注目しておきたい。李鋭は「一二・九世代」について、引き続き興味深い指摘を行っている²⁸。

一方ではマルクス・レーニン主義の革命的学説が植え付けられて、共産イデオロギーの洗礼を受けて組織的かつ規律的な観念を受け入れたが、また一方では依然として元来の民主自由の理念を抱いているため、思考方法と行動様式においては、毛沢東個人を崇拝の対象として「毛沢東思想」を正統イデオロギーとする「党の文化」とは内在的な齟齬を生じたのである。

「一二・九世代」は、中華人民共和国建国以前から共産党に入党していた老幹部である。青年時代からの理想である「民主自由の思想」により、「“党の文化”との内在的な齟齬」が生じたという李鋭の指摘は、前述した丁東の指摘にあるように、その後に展開された延安における抢救運動、反右派運動、文化大革命等を指しているものと考えられる。

李鋭の言説に基づけば、「一二・九世代」を端的に象徴するのは「自由民主の理念」であるという。「自由」と「民主」について、李鋭は李昌の言葉を借りて「彼は“外部の政治的な民主”と“内部の民主の精神”をとりわけ強調した。前者は国家の政治生活の

ことであり、すなわち人民群眾が言論、新聞出版、結社とデモなどの自由を享受することで、後者は“青年自らも適切に実行すべき民主”である」と記している。また、建国以後の政治、経済、文化制度と政策については、「“一二・九”知識人がかつて反対した“一つの政党、一人のリーダー、一つの主義”の再演”であったと厳しく批判している。李鋭は李昌という一二・九運動の代表人物を語りながら、同時代の自分たち「一二・九世代」についてさらに次のように論を展開する²⁹。

私たちが折につけて「自由・民主・平等」などのスローガンを叫んだが、しかしここでの自由はいわゆる「規律」の制限のもとでの自由であり、民主はいわゆる「集中指導のもとでの民主」、平等は「共産風」の平均のことで、本来の意義での自由、民主、平等とは隔たりが甚だしいものであった。(中略) 中国が改革開放を実行するためには、スターリン式の毛沢東晩年のいわゆる「社会主義」を捨てて、民主、科学、法治という人類の文明の主流と融合し、普遍的価値を認めて世界の文明の基準に合わせなければならない。この意味からも、「一二・九」グループが最初にアイデンティティーを感じた自由、民主、平等の価値目標に回帰しなければならないのだ。

李鋭が語る「一二・九世代」とは、同時代人としてのアイデンティティーの拠り所であると同時に、単なる過去の回顧にとどまらない、「青年時代の理想」の再構築を意味するものであり、さらには建国以来現在にまで続く体制への批判として語られているといえよう。李鋭は、一二・九運動の代表的人物である李昌を評価することで、「一二・九世代」という言葉で自分たちのアイデンティティーを規定することに一種の権威付けを行っており、自己定義の正当性をさらに強調しているのだ。李鋭の言説には、「一二・九世代」が自らの原点を一二・九運動に求めざるを得ない何らかの内的必然性が存在していると考えられる。

4. 雑誌『炎黄春秋』に集う「一二・九知識人」

4.1. 現代中国の言論空間における『炎黄春秋』

これまで、丁東らによる座談会の中で議論された「一二・九知識人」と、自らも「一二・九世代」である李鋭の言説について検討してきた。丁東が指摘しているように、「一二・九知識人」の中には歴史の「反思」を行うグループがあり、その代表的な人物たちが于光遠、李鋭、杜潤生、李昌らであるという。李鋭と李昌についてはすでに述べたので、ここでは杜潤生と于光遠について若干補足しておきたい。

杜潤生は1913年生まれで、北平師範大学在学中に学生運動のリーダーとして一二・九運動に参加した。1936年に入党後は土地改革に従事し、一貫して農村改革の専門家として国務院農村發展研究中心主任や党中央農村政策研究室主任を務め、改革開放以後も農村経済改革を推進した人物である³⁰。

一方、于光遠は1915年生まれで、清華大学在学中にやはり一二・九運動に参加している。1937年に入党後は、中共中央宣伝部で青年工作や文化教育工作に従事し、その後は国家計画委経済研究所長、中国社会科学院副院長を務めるなど、著名な哲學家として知られている³¹。1914年生まれの李昌、1917年生まれの李鋭とともに、いずれも90歳代の「改革派老幹部」たちである。

この杜潤生、李昌、于光遠、李鋭ら4名の「一二・九知識人」が顧問を務めているのが、1990年に創刊された近現代史を中心とする総合月刊誌『炎黄春秋』である。「詳細で正確な資料に基づき、事実をありのままに記し、飾らず、世俗におもねらず、権勢に迎合せず、事実を重んじて真実を記録し、歴史を鑑とする」という編集方針に基づき、かつて党や政府の要職にあった34名が編集委員として名を連ね、「改革派老幹部」たちが多く寄稿することから、彼らのネットワークが体現された雑誌であるといえよう。同誌で発表された李鋭の政治体制改革論における「新聞出版法」の議論と2006年の「氷点事件」をめぐる言論については、これまでの研究で明らかにしたとおりである³²。

顧問を務める杜潤生は、『炎黄春秋』の責任」について次のように記している。「現在、中国の社会には一群の知識人たち、かくも歴史に通じた文化人たちがおり、彼らは発言の場所と活動の場所を必要と

している。この雑誌はそういう特殊な責任を負っているのだ」、『炎黄春秋』が歴史の経験を総括する際、常に民主と政治体制改革の問題に言及する。これは、中国共産党第15回党大会の声明にある政治体制改革推進の任務と合致するものだ。杜潤生は、さらに「人民の基本的な権利を保証する上で最も重要なのは、言論の自由、学問の自由、財産保障制度である」と主張している³³。

杜潤生が記した「一群の知識人たち」とは、年代的には「一二・九知識人」を筆頭とする「改革派老幹部」たちと、歴史の回顧を通じて「民主と政治体制改革」の現実の問題について主張を展開する体制内外の知識人たちのことだ。『炎黄春秋』は大胆なテーマの選択や主張によって独自の存在感を打ち出しているが、党や軍の老幹部たちが深く関与しているために、党の宣伝部門などからも言わば黙認されている存在である。杜潤生は「民主と政治体制改革」について言及しているが、同時に政治体制改革が党大会で議論された点にも触れており、それによって『炎黄春秋』の正当性を強調しているといえよう。

批判対象の言説を援用して主張することで矛盾を指摘し、より痛烈な批判を行うという手法は巧妙にパターン化されており、これは体制内にあって体制批判を行う「改革派老幹部」たちの巧みな手段の表れとして読みとることが可能である。『炎黄春秋』が、体制内の「改革派老幹部」たちのみならず、体制内外の知識人たちからも支持されている要因のひとつとして指摘することができよう。顧問として同誌を擁護する「一二・九知識人」たちの存在は歴史的かつ政治的な意味を有しており、『炎黄春秋』は独自の言論空間を形成する特権的な存在である。

4.2. 『炎黄春秋』2008年11月幹部退任要求事件

大胆な言論を展開する『炎黄春秋』が停刊や廃刊処分を受けずに存続していることから、筆者はこれまでの研究において『炎黄春秋』を党内外の多様な言論の表出と見る一方で、体制内にあって体制批判を行う「改革派老幹部」たちと、急進的な改革意見の発散方法として手立てを講じ利用する現体制との間に、一種の「持たれ合い」ともいえるべき相互依存関係が成立している点を指摘した³⁴。その後、『炎

黄春秋』が形成する言論空間の基本的要素には変化は見られないが、『炎黄春秋』をめぐる外的環境には重要な変化が生じた。それが、2008年11月の『炎黄春秋』幹部退任要求事件である。

2008年第9期の『炎黄春秋』に元新華社四川分社社長の孫振による「文革後期私と四川省書記の交流」と題する文章が、筆者自らの体験を記す「親歴記」の企画として掲載された³⁵。「四川省書記」とは趙紫陽のことで、文革期の混乱の中で孫振が直接見聞した四川省の農村政策と趙紫陽の人柄を評価する内容であり、「89年以後、中国の大陸のメディアで初めて前中国共産党総書記の趙紫陽をメインに描いた積極的な報道」であった³⁶。「89年」とは言うまでもなく1989年の天安門事件のことであり、現在の中国において胡耀邦と趙紫陽に関するメディアの報道が厳しく管理されている状況を鑑みれば、孫振の文章は趙紫陽評価の画期的な内容であり、掲載した『炎黄春秋』の存在感を一層際立たせるものとなった。

しかし、香港で発行されている雑誌『亜細亞週刊』の2008年11月23日号が報じたところによれば、「孫振の文章が発表された後、すぐさま中南海のある前指導者の不満を買うところとなり、中央の政治局常務委員に厳粛な処置を取るよう要求した。20日余り後の10月中旬、文化部はこの件の処理に着手し、先日、文化部は『炎黄春秋』の社長、副社長、秘書長、編集委員が高齢であることを口実にして交代するよう求めた」のだという³⁷。『亜細亞週刊』の報道は、中国国外に拠点を置いて中国国内の問題を報道する複数の中国語ウェブサイトに掲載され、関連報道なども増えて広く知られるところとなった³⁸。

『炎黄春秋』の呉思編集長はアメリカの政府系ラジオRFAの取材に対し、杜導正社長と楊繼繩副社長に対する退任要求があったことを認め、「勸告は当局から礼儀正しく節度のある説得がなされ、書面の通知や処分などはなかったが、しかしその勢いは比較的厳しいものであった」と語った³⁹。

1923年生まれの杜導正は元新聞出版総署署長、楊繼繩は『鄧小平時代 中国改革開放紀実』⁴⁰の著者として知られる元新華社記者である。『炎黄春秋』は中華炎黄文化研究会が主宰する雑誌であるために同研究会が登録している文化部から通達があったわけ

だが、雑誌としては完全に民間の雑誌である。党や政府から資金面で助成を受けずに自由な言論を展開している雑誌にとって、雑誌編集部内の人事に圧力が加わるのは極めて不自然な事例である。

11月16日に筆者が呉思編集長に確認したところ、「我々は面倒なことにぶつかっているが、しかし問題は大きくはない。上級機関は当方の老先生たちに自ら退職するよう求めているが、こちらは退かず、退職もしない。先方もおそらく何も方法はないだろうから、我々は楽観視している」⁴¹というコメントが得られた。結果的に、杜導正社長をはじめ編集部の幹部は当局からの退任要求を受け入れることはなく、『炎黄春秋』は圧力が加えられたとはいえ、直接的な処分は免れ得る特殊な雑誌であることを、改めて示すこととなったのである。

前述の『亜洲週刊』によれば、『炎黄春秋』がこれまでに発表し「あるハイレベルの人々の不満を買った重要な文章」は、①趙紫陽に関する文章、②胡耀邦に関する文章、③政治体制改革を提唱する文章、④中国社会の性質と発展の道を討議する文章、⑤自らの経験として史実を語る文章など、主に5種類に分類されるという⁴²。これを見ると、中国の言論空間には依然として「禁区」が存在していることが明らかであり、『炎黄春秋』が発表する関連文章とそれらをめぐる当局の反応は、言論空間における知的ヘゲモニーの争いとして理解することができる。

孫振による趙紫陽評価に不満を抱いた「中南海のある前指導者」については『亜洲週刊』では明らかにされなかったが、その後の香港メディアではさらに踏み込んだ報道が見られた。雑誌『前哨』2008年12月号によれば、孫振の文章を目にした江沢民元国家主席が中央政治局常務委員の李長春に事情を問い合わせ、李長春が文化部に処分を指示したという。しかし、文化部の党組織では、中華炎黄文化研究会が民間団体であることや、『炎黄春秋』が民間の雑誌で国家の経費を使っておらず、編集面でも国家が関与していないのに、年齢を理由に幹部の調整を行うことは法律に反するのではないかという懸念も出され、処分をめぐる意見が一致しなかったようだ⁴³。江沢民と李長春の関与を検証する術はないが、共産党内における一部の勢力が『炎黄春秋』の言論に

敏感な反応を示すことは想像に難くない。

2008年11月の幹部退任要求事件については、李銳をはじめとする4名の編集顧問からは何もコメントが発表されてはいないが、『前哨』が報じた次の一節は、『炎黄春秋』の存在が現体制にとって一種の圧力となっていることを示しているといえよう⁴⁴。

『炎黄春秋』の4名の顧問は「六四」当時民間の活動を支持した中央顧問委員会委員——杜潤生、李昌、于光遠、李銳である。党内民主派の色彩、胡耀邦・趙紫陽の色彩、「六四」の色彩があり、それらは党内の老幹部や老知識人たち、胡耀邦・趙紫陽の下にいたあらゆる良知のある中年の英才たちを団結させ、彼らは作家群と読者群になっている。

幹部退任要求事件が起ったのは、天安門事件20周年の2009年を迎える直前のことであった。事件が示したように、中国では依然として趙紫陽に関する報道が厳しく管理されているが、これは換言すれば1989年の天安門事件が想起されることへの強い警戒でもある。しかし、そうした警戒があるにも関わらず、当局が『炎黄春秋』に対して停刊や廃刊などの厳重処分を下すことなく幹部退任要求という婉曲的な対応を取った背景には、民間の刊行物であるという理由はもちろんだが、杜潤生、李昌、于光遠、李銳ら4名の顧問たち「一二・九知識人」の存在が強く影響していることは明らかである。党の長老たちが名を連ねる『炎黄春秋』には、当局は強引な処分を下すことはできないが、却ってその事実が『炎黄春秋』の存在を一層際立たせ、「六四」の色彩を想起させることにもなっているといえよう。

雑誌『炎黄春秋』に集う「一二・九知識人」たちの存在とは、天安門事件にも密接に関係する現実の政治的な問題でもある。『炎黄春秋』をめぐる重層的な言動は、中国の言論空間における知的ヘゲモニーをめぐる争いであり、また同時に共産党内における政治ヘゲモニーをめぐる争いでもあると考えられる。

5.おわりに

中国社会科学院近代史研究所の劉志琴は、かつて

『炎黄春秋』を分析し「老革命家の覚醒」と称して評価した⁴⁵。劉志琴によれば、『炎黄春秋』の「老革命家」たちは「程度は異なるものの専制主義の影響を受け、党の従順な道具となっており、個人の自主的な意識というものはめったに見られない」のだが、「文革の災禍と共産党の度重なる過ちは、彼らに信仰の動揺を経験させ、それによって奔走の果てに再組織化が起こり、自我を取り戻し、彼らが若年の頃に追い求めたそして一度は失った民主の旗が再び掲げられた」のだという。

劉志琴の「覚醒」という指摘はある一面では妥当であるかもしれないが、『炎黄春秋』には様々な世代の知識人が集い、その歴史的な経験や主張も多元的であるために一元的に概括することはできず、本稿が検討してきた「一二・九知識人」たち、中でも李鋭の言説については劉志琴の指摘は該当しない。「理想主義と独立した人格」が顕著な特徴であると指摘される「一二・九知識人」たちが、「党の従順な道具」から「自我を取り戻し」、「新たな覚醒」に至ったという過程は、各個人の経験をより詳細に検討する必要があるだろう。

本稿の主題である「一二・九知識人」を検討する上で、筆者は当事者たちの意識の変化にさらに着目することが必要であると考え。『炎黄春秋』の顧問を務める于光遠が2005年に発表した自伝を見ると、幼少期から各年代の回想が綴られている中で、一二・九運動に関する記述は極めて限定されたものであり、「一二・九知識人」という表現は見られない⁴⁶。同年に発表された一二・九運動を回想する文章では、一二・九運動の中心となった清華大学の当時の様子や運動への参加が契機となって共産党に入党したことは記されているが、ここでも「一二・九知識人」についての言及は見られない⁴⁷。それに対して、李鋭は前述したように1980年代に一二・九運動を回顧した際には用いなかった「一二・九知識人」という概念を2008年になって使用し、自己定義をするだけでなく『炎黄春秋』に集う同世代の「改革派老幹部」の同志たちを「一二・九知識人」と称して、歴史における自分たちの存在を際立たせて権威付けを行い、影響力を発揮しているのである。当時、北平で運動に参加した于光遠ではなく、地方都市の武漢で学生

運動に参加した李鋭が、一二・九運動の代表的人物である李昌を顕彰し、「一二・九知識人」の理念や歴史的な責任を説きながら、現体制への批判を行っていることは、極めて興味深いことである。

李鋭が一二・九運動に自己規定の原点を求めるのは何故であろうか。党の老幹部として数々の経歴を有する李鋭が、人生の最晩年に至って1935年の学生運動をなお提起し、仮に意識的であっても無意識的であったとしても、「一二・九知識人」の歴史的使命を語ることに、何らかの内的必然性があるからだろう。李鋭が一二・九運動に根拠を求めるのは、それが彼らの世代が最初に経験した政治運動ということだけでなく、彼らの世代の根本である「ナショナルアイデンティティーとしての抗日」に直接関与していた運動であったからだと考えられる。李鋭たちの世代にとって、「抗日」の記憶を再生し、その原点となる一二・九運動を回顧することは、自らの正当性と求心力を高める有効的な手段なのではないだろうか。つまり、「一二・九知識人」という概念は、李鋭たちが知的ヘゲモニーを形成し維持する条件づくりとなっているといえよう。

このように考えると、現代を語る際に過去の歴史を持ち出す手法や、運動の実態への検証よりもその語り方や記憶の在り方が際立っている点、「ナショナルアイデンティティーとしての抗日」を繰り返し主張することは、共産党の「政治文化」が色濃く反映された政治パターンとして分析することが可能ではないだろうか。李鋭はこれまでの党員生活において「毛沢東思想」を正統イデオロギーとする“党の文化”とは内在的な齟齬を生じてきたというのが、そうした批判的な言論の根底となる思考方法や行動様式において、共産党の「政治文化」の影響が排除されないことは、李鋭のある種の限界性として理解しておくべきだろう。

もっとも李鋭にとっては一二・九運動当時の経験や史実としての検証が重要なのではなく、「一二・九知識人」という自己定義によって原点回帰し、同世代に共通の記憶を再生産して「自由」や「民主」を論じることにより現実的な意義があると思われる。さらに言えば、「一二・九知識人」という理念を提起する手法が、ある種の限界性を内包しながらも一定

の有効性をもっているということは、つまりそうした状況こそが、現代中国の言論空間の現実を物語っているともいえよう。

前述した劉志琴は、「老革命家の覚醒」について次のように分析を続けている^{4 8}。

これらの老幹部たちにとっては、『炎黄春秋』は正に新時代の新たな覚醒を体現する作用を持つものである。正確に言えば、彼らは共産党の支持派であり転覆派ではなく、決して自由主義者ではなかった。しかし中国の自由主義が未だに確固たる足場が固められていないという現場下にあって、彼らは程度こそ異なるものの自由主義の代弁者となっている。

『炎黄春秋』に集う「改革派老幹部」たちは、本来は体制批判を含めた自由な言論を展開すべき「知識人」の代替機能を果しており、『炎黄春秋』は世代や体制内外の立場を超えたより多くの「知識人」や読者たちの支持を得て、圧力に屈することなく独特な言論空間を形成している。その最大の擁護者が「一二・九知識人」たちであるが、その機能的役割には影響力と同時に限界性もある。『炎黄春秋』で発表された「改革派老幹部」たちの言説がより広範な言論空間にいかなる作用を与え得るかという問題については、さらなる考察が必要である。

本稿が考察した「現代中国の言論空間における“一二・九知識人”」とは、彼らの存在を通して歴史の文脈で再構成される現実の諸問題であり、現代中国の言論空間における諸要因を重層的に読み解く必要性を示す象徴的な事例であるといえよう。

¹ 拙論「中国における『老幹部』問題——李銳を中心に——」日本現代中国学会発行 研究年報『現代中国』第 82 号、2008 年 9 月、PP.29-41。なお、「知識人」、「改革派老幹部」、前述の「政治文化」の各事項については、それぞれの概念を明らかにすることが必要だが、本稿ではそれらの本質論を議論することを目的とはせず、あえてこれらの用語をカッコ書きのまま使用する。

² 原文は「李昌和“一二・九”那代人」、『炎黄春秋』

2008 年 4 期、PP.1-4。脚注には『党内覚醒者——李昌在中国改革年代』の序として」と記されているが、同書の発行については未確認である。

³ 苑書義 主編『中国歴史大辞典』河北教育出版社、1988 年、PP.715-716。

⁴ 「一二九運動的偉大意義」『毛沢東文集』第 2 巻、人民出版社 1993 年、P.250-258。

⁵ 同上、P.251。

⁶ 『人民日報』1995 年 12 月 9 日。

⁷ 代表的な資料や回想録は以下のとおり。清華大学中共党史教研組『一二九運動史』編写組編『一二九運動史』、北京出版社、1980 年。楊述『一二九漫話』生活・読書・新知三聯書店、1981 年。孫剛『一二九運動』新華出版社、1991 年、など。

⁸ 平野 正『北京一二・学生運動——救国運動から民族統一戦線へ——』研文出版、1988 年、P.12。

⁹ 丁東・高増徳・智効民・謝泳「“一二・九”知識分子的歴史命運」『書屋』2003 年 12 期。座談会の開催時期は記されていない。座談会の記録は、2004 年に広東人民出版社から出版された、丁東・高増徳・趙誠・智効民・謝泳 編『思想操練』にも転載されている。「一二・九知識人」を主要なテーマとした研究成果は、筆者が CNKI（中国知網、中国国内の主要な定期刊行物、学術団体の重要会議、博士・修士論文を含む文献量 3000 万編のデータベース）で検索したところ唯一該当したものが、この座談会記録であった。

¹⁰ 前掲、「“一二・九”知識分子的歴史命運」、P.41。何家棟は 1923 年生まれ、2006 年 10 月 16 日死去。

¹¹ 陳敏之 編『顧準文集』貴州人民出版社、1994 年。陳敏之・丁東 編『顧準日記』経済日報出版社、1997 年。陳敏之・顧南九 編『顧準文存 顧準筆記』、同『顧準文存 顧準日記』、同『顧準文存 顧準自述』、同『顧準文稿』中国青年出版社、2002 年、など。

¹² 前掲、「“一二・九”知識分子的歴史命運」、P.42。

¹³ 同上。

¹⁴ 原文「人生態度和知識眼光」、同上。

¹⁵ 1935 年 12 月 9 日の請願運動で起草された 6 項目。前掲、『北京一二・学生運動——救国運動から民族統一戦線へ——』P.31。

¹⁶ 1935 年 12 月 10 日付「宣伝大綱」、同上、P.36。

¹⁷ 前掲、「“一二・九”知識分子的歴史命運」、P.44。

¹⁸ 李行健・曹聡孫・雲景魁 主編『新詞新語詞典』語文出版社、1993 年、P.122。

¹⁹ 李銳「運動前後在武漢」清華大学中共党史教研組『一二九運動回憶錄 第一集』人民出版社、1982

年、PP.377-406。この文章は、『李銳往事雜憶』江蘇人民出版社、1997年にも掲載されている。

²⁰ 前掲、李銳「運動前後在武漢」P.402。

²¹ 同上、P.401。

²² 同上、P.405。

²³ 李銳「同齡朋友告別了——懷念密加凡」『江漢論壇』2006年10月、PP.131-132。

²⁴ 同上、P.132。

²⁵ 李銳「李昌和“一二・九”那代人」『炎黃春秋』2008年4期、P.1-4。注によれば、同文は『党内覺醒者——李昌在中国改革年代』の序文として書かれた。

²⁶ 同上、P.1。

²⁷ 同上、P.2。

²⁸ 同上、P.3。

²⁹ 同上、P.4。

³⁰ 杜潤生『杜潤生改革論集』中国發展出版社、2008年。杜潤生の農村改革に関する回顧録としては、他に『杜潤生自述：中国農村体制変革重大決策紀実』人民出版社、2005年などがある。

³¹ 于光遠『于光遠改革論集』中国發展出版社、2008年。于光遠の著書は数多いが、代表的なものとしては、『于光遠自述』大象出版社、2005年、『“新民主主義社会論”的歷史運命——讀史筆記』長江文芸出版社、2005年、『我的編年故事 1939-1945（抗戰勝利前在延安）』大象出版社、2005年、『我的編年故事 1945-1949（迎接全国解放）』大象出版社、2005年、『1978：我親歷的那次歷史大轉折——十一屆三中全會的台前幕後』中央編訳出版社、2008年、などがある。

³² 前掲、拙論「中国における『老幹部』問題——李銳を中心に——」。

³³ 杜潤生『炎黃春秋』的責任』『炎黃春秋』2001年第1期、P.3。

³⁴ 前掲、拙論「中国における『老幹部』問題——李銳を中心に——」P.38。

³⁵ 孫振「文革後期我與四川省委書記的交往」『炎黃春秋』2008年第9期。

³⁶ 江迅「炎黃春秋專文報道趙紫陽面臨整肅」『亜洲週刊』22卷46期（2008年11月23日号）。

³⁷ 同上。

³⁸ 例えば、「新世紀新聞」

<http://www.newcenturynews.com/Article/china/200811/20081114225036.html> など（2008年11月14日）。

これはアメリカのRadio Free Asiaが『亜洲週刊』の報道を一部転載する形で報じたものだが、この

他、15日に『炎黃春秋』呉思編集長のコメント、27日のVOAは、『炎黃春秋』福社長の楊繼繩のインタビュー、同日のBBC中国語ウェブサイトは呉思編集長のインタビューなどを報道した。

³⁹ 呉思：拒絕接受“勸告”

http://www.rfi.fr/actucn/articles/107/article_10494.asp（2008年11月15日）。

⁴⁰ 楊繼繩『鄧小平時代 中国改革開放紀実』中央編訳出版社、1998年。

⁴¹ 呉思編集長のコメント、2008年11月16日。

⁴² 前掲、江迅「炎黃春秋專文報道趙紫陽面臨整肅」『亜洲週刊』。

⁴³ 「江沢民插手整肅『炎黃春秋』」『前哨』2008年12月。

⁴⁴ 同上、P.17。

⁴⁵ 劉志琴「老革命家の新たな覺醒——『炎黃春秋』の批評と分析——」愛知大学国際中国学研究センター国際シンポジウム、2003年10月31日—11月2日、第3セッション〈文化〉新啓蒙論と新自由主義および新左翼（「中国近代論」と「ポスト・モダン」の評価をめぐるアポリア）、P.140。

⁴⁶ 『于光遠自述』大象出版社、2005年、P.40-41。

⁴⁷ 于光遠「70年我所親歷的一二・九運動」『北京党史』2005年6期、P.54。

⁴⁸ 前掲、劉志琴「老革命家の新たな覺醒——『炎黃春秋』の批評と分析——」P.140。

(Received: December 31, 2008)

(Issued in internet Edition: February 8, 2009)